「中華経典古籍庫」利用体験記

山下　一夫

中華経典古籍庫は、中華書局を中心とした古典の排印本を電子化したデータベースである。本製品は以前、Windows Server 対応のネットワーク版が発売されていたが、自前でサーバーを準備・管理する必要があったため、導入のハードルが高いという問題があった。しかし現在では中国のサーバーに繋ぐリモートサーバー版が登場したことで、お金さえ用意できれば（！）導入は簡単になっている。筆者の勤務先では、二〇一七年より東方書店を介してこのリモートサーバー版の契約を行い、現在第一期から第四期までの利用が可能となっている。

本データベースについては、ネットワーク版しか発売されていなかった二〇一四年の段階で、すでに千田大介氏が詳細なレポートを発表している（『漢字文献情報処理研究』第十五号、漢字文献情報処理研究会編、好文出版、一一〇頁～一一三頁、二〇一四年一〇月、http://jaet.sakura.ne.jp/?plugin=attach&refer=%E5%87%BA%E7%89%88%E7%89%A9%2F%E3%80%8E%E6%BC%A2%E6%83%85%E7%A0%94%E3%80%8F%E7%AC%AC15%E5%8F%B7&openfile=JJ15.pdf）。そこで紹介されている本データベースの特徴は以下の通りである。

（一）本データベースは、中華書局（およびその他幾つかの出版社）の排印本という、信頼の置けるテキストが元になっているため、例えば「中国基本古籍庫」などよりも信頼性が高い。

（二）電子テキストから、元になった排印本の版面も確認することができる。

（三）中華書局の排印本では一般に固有名詞に傍線を、書名

に波線を付しているが、これがデータに反映されているため、固有名詞や書名などに限定した検索を行うことができる。

（四）「引用」機能を用いると、テキストの電子データだけでなく、引用箇所が書誌情報付きでペーストされる。

これは論文の執筆等に際しては非常に重宝する。

以上の内容は、多少インターフェースが変わってはいるものの、リモートサーバー版にもすべて受け継がれている。氏のレポートでは他にも、本データベースの意義や性質などについても述べられているが、詳細はそちらを参照してもらうとして、以下本稿ではリモートサーバー版の内容や、個人的な使用感について述べることとしたい。

中華経典古籍庫リモートサーバー版は、現在のところ第五期までリリースされている。それぞれの収録内容については、中華経典古籍庫のトップページから確認することができ、第一期は二九四件、第二期は一三六件、第三期は四三八件、第四期は四〇五件、第五期は六二九件となっている。なお東方書店からも収録内容のExcelファイルが配布されており（https://www.toho-shoten.co.jp/export/sites/default/er07/list/chukakeiten.zip）、こちらでは第二期が一三七件となっているが、それはここに含まれる『周易函書』に収録される『召対録』を、別に独立した一件として数えているためである。

第一期から第五期までのそれぞれのセットは、ある程度のまとまりがある。と言っても、例えば第何期が四部分類の何部、となっているわけではなく、それぞれが内部で四部分類の構成を持っている。今、各期に収録されている図書が含まれる叢書名を挙げながら、その内容について検討してみたい。

第一期には二十五史と新編諸子集成がすべて含まれている。また叢書名としては挙がらないが、全唐詩と全宋詞もここに収録されているため、第一期は割に基本的な典籍が集まっていると言える。

中国思想史資料叢刊、十三経清人注疏、易学典籍叢刊、理学叢書、韻学叢書、中国史学基本典籍叢刊、二十五史、編年、紀事本末、中国古代地理総志叢刊、唐宋史料筆記叢刊、元明史料筆記叢刊、清代史料筆記叢刊、学術筆記叢刊、新編諸子集成、古体小説叢刊、中国仏教典籍選刊、康有為学術著作選、中国古典文学基本叢書、中国歴史文集叢刊、中国文学研究典籍叢刊

第二期は一三六件と、最も分量が少ない。史料筆記叢刊のシリーズは各期に分散して収録されてはいるが、半数以上がここに集中している。

易学典籍叢刊、理学叢書、中国史学基本典籍叢刊、唐宋史

料筆記叢刊、元明史料筆記叢刊、清代史料筆記叢刊、学術筆記叢刊、中国古代地理総志叢刊、中国古代都城資料選刊、新編諸子集成続編、中国古典文学基本叢書、中国文学研究典籍叢刊、中国歴史文集叢刊、余嘉錫著作集

第三期は道教典籍選刊や中国古代都城資料選刊、中外交通史籍叢刊などが収録されているのが特徴である。

中国思想史資料叢刊、十三経清人注疏、易学典籍叢刊、理学叢書、訓詁学叢書、語言文字研究資料、中国史学基本典籍叢刊、中外交通史籍叢刊、中国古代地理総志叢刊、中国古代都城資料選刊、年譜叢刊、新編諸子集成続編、唐宋史料筆記叢刊、元明史料筆記叢刊、清代史料筆記叢刊、学術筆記叢刊、古体小説叢刊、道教典籍選刊、中国仏教典籍選刊、中国古典文学基本叢書、中国文学研究典籍叢刊、中国歴史文集叢刊、詩文別集、孫詒譲全集、王夫之著作、王応麟著作集成、康有為学術著作選、戚継光研究叢書

第四期は中華書局以外にも、巴蜀書社、斉魯書社、華東師範大学出版社、遼海出版社、天津古籍出版社、鳳凰出版社の排印本が加わっている。収録叢書の数が増えているのは、それは様々な出版社で出している、あまり冊数の多くないシリーズも入っているからである。仏僧やイエズス会士の著作など、伝統的な士大夫文学の枠からやや外れた典籍も入っているのが特徴であろう。特に仏典は、CBETA（中華電子仏典協会、http://www.cbeta.org/）によって電子版が網羅的に作成されているとはいえ、各出版社から出された排印本は独自の価値を持つ。

中国思想史資料叢刊、中国古典名著訳注叢書、歴代文史要籍注釈選刊、歴史文献与伝統文化叢刊、中華文史要籍叢刊、清華古典文献研究叢刊、斉魯文化経典文庫、広西地方古籍整理研究叢書、遼海学術文庫、漢語史与中国古典文献学研究叢書、中国史学基本典籍叢刊、二十四史研究資料叢刊、二十四史校訂研究叢刊、唐宋史料筆記叢刊、清代史料筆記叢刊、学術筆記叢刊、年譜叢刊、淄博市地情史料叢書、書目題跋叢書、摹廬叢著、新編諸子集成続編、歴代子家選刊、道教典籍選刊、中国仏教典籍選刊、普陀山仏学叢書、仏典叢書、歴代芸術史料選刊、中国文学研究典籍叢刊、中国歴史文集叢刊、古典文学研究資料彙編、清代名家詞選刊、歴代総集選刊、詩賦研究叢書、明清山左作家叢書、明代別集叢刊、清代別集叢刊、西北師大古籍整理研究所隴右文献叢書、朱子全書外編、孫詒譲全集、余嘉錫著作集、王叔岷著作集、郝懿行集、岑仲勉著作集、王士禎全集、唐長孺文集、陳眉公著作集、溥益大師全集、朱有燉集、顔光猷詩文箋注

第五期は中華書局以外に、鳳凰出版社、遼海出版社、三晋

出版社の排印本も加わっている。各期の中で最も件数が多い上に、冊数の少ないシリーズが第四期よりもさらに多く収録されているため、含まれる叢書数はかなり増加している。注目すべきは、戯曲や考古学など、伝統的な士大夫文学の中心からはやや外れる文献が第四期以上に入っていることである。しかしそれでもまだ、『三国志演義』、『水滸伝』、『西遊記』といった白話小説の類は含まれていない。これは、そうした分野が人民文学出版社や上海古籍出版社などの「テリトリー」であることも関係しているだろう。

中国思想史資料叢刊、十三経清人注疏、易学典籍選刊、理学叢書、理学淵源考弁叢刊、訓詁学叢書、中国史学基本典籍叢刊、歴史文献与伝統文化叢刊、北京大学中国古代史研究中心叢刊、北大民族史文庫丙種一号、歴史研究資料、二十四史研究資料叢刊、国家清史編纂委員会・文献叢刊、歴代紀事本末、中国古代都城資料選刊、考古学専刊丙種第四号、思勉人文学術・中国江南研究系列、山西文華・著述編、三晋石刻大全、晋城歴史名人文存、山西大学建校一〇〇週年学術文庫、越地文献叢刊、萍郷学院文廷式研究所叢刊、福建旧方志叢書、嘉峪関市旅游文化建設叢書、中外関係史名著訳叢、中国和欧洲文化交流史文献叢刊、明清之際西方伝教士漢籍叢刊、唐宋史料筆記叢刊、清代史料筆記叢刊、敦煌文献合集、年譜叢刊、新編諸子集成続編、古体小説叢刊、道教典籍選刊、中国仏教典籍選刊、国学入門叢書、中国文学研究典籍叢刊、中国古典文学基本叢書、国家社科基金後期資助項目、古典文学研究資料彙編、古典文献新視野叢書、中国古典名著訳注叢書、人文介休系列叢書、文学研究資料、歴代文挙要、書目題跋叢書、日本宋代文学研究叢刊、武威歴代詩詞叢書、黄節詩学選刊、孫詒譲全集、王応麟著作集成、徐仁甫著作集、王叔岷著作集、焦循著作集、朱季海著作集、戚継光研究叢書、黄侃文集、嘉定銭大昕全集（増訂本）、王仲犖著作集、金聖歎全集（修訂版）、銭南揚文集

全体を通してみると、史料筆記叢刊、中国古典文学基本叢書、中国仏教典籍選刊など、各期に跨がっている叢書が少なくないことが解る。ただ、実際に使用する場合には各期ごとではなく、全体から検索を行うので、同一のシリーズが別のセットの中にあっても特に不都合はない（もちろん全期を買っていれば、であるが）。

第一期から第五期を全部合わせると、経部二一三件、史部五五九件、子部五七八件、集部五五一件、叢書部一件となる。ちなみに叢書部で唯一入っているのは、『四庫輯本別集拾遺』である。

中華経典古籍庫は、重要な古典を網羅することを志向した

中国基本古籍庫や中央研究院の漢籍電子文献とは性質を異にするため、当然のことではあるが、例えば『十三経注疏』など、中華書局（および本データベースに参加している出版社）で排印本が出ていない書籍は収録されていない。しかしそれは逆に言えば、例えば部数が少なかったり、出版されてから時間が経ってしまったりしたために、入手が難しくなっている排印本も多数収録していることを意味している。そうした点で、本データベースは収録されている書籍の「電子出版」としての側面があるとも言えるだろう。古典籍の電子データは、合法・違法を問わずネット上にたくさん「転がって」はいても、「電子出版」はあまり多くない。

例えば二十五史などは、同じく中華書局排印本に準拠した中央研究院の漢籍電子文献がすでに存在するので、本データベースを使う必要はない、と思うかも知れない。しかし中華経典古籍庫は、固有名詞には傍線、書名には波線が引かれた排印本と同じ状態で閲覧できるし、前述のとおり便利な機能があることは重要である。

なお、検索結果が表組みで一度に一〇件ずつしか表示されないためコピーが煩雑になるという、ネットワーク版に見られた欠点は、このリモートサーバー版でも解消されていない。そもそもコピーをする際に、ブラウザ上で単純に範囲を指定してコピーするのではなく、いったん「複製」を経由しないと文字化けしてしまうし、また固有名詞の傍線や書名の波線が表示されているのに、そうしたマークアップ情報は「複製」によってもコピーすることができない。中華経典古籍庫は、中国古典籍データベースの現段階における「優等生」ではあるかも知れないが、「これで完成」というわけではもちろんない。今後、第六期以降が追加される可能性もあるし、そもそも全く別の、より有用なデータベースが登場することも充分考えられる。

筆者の勤務先は、人文系の予算が決して潤沢に使えるわけではない。そしてそれは、日本の多くの学術機関も同じだろう。そうした中で、何とか中華経典古籍庫を購入はしたが、この先まだまだ新しいデータベースが出るかと思うと、今後どうやってお金を工面したものかと、ちょっと心配になる。

（やました・かずお　慶應義塾大学）